

第17回「ハガキにかこう海洋の夢コンテスト」体験乗船

○廣瀬重之・藤倉克則・矢吹彬憲・後藤慎平・柴田桂・川上創・金井隆憲・藤井友紀子・武内境子・児玉真弓（海洋研究開発機構）、小味亮介（東京都葛西臨海水族園）、根本卓・鈴木良博（新江ノ島水族館）、八巻鮎太（鹿児島水族館）、山本智子（鹿児島大学）

海洋研究開発機構では、未来を担う子供たちの海洋に対する夢や憧れ、興味喚起を目的として、ハガキに海洋への夢やアイデアを自由に描く「全国児童『ハガキにかこう海洋の夢コンテスト』」を実施している。第17回を迎えた平成26年度の応募数は22,780点であった。この中から入賞を果たした15名の受賞者と保護者を対象に、平成27年8月8日から10日に鹿児島湾若尊火口周辺海域で海洋調査船「なつしま」に乗船する日帰りの体験乗船を実施した。なお本航海は、水族館等との連携を深め、海洋科学技術の理解増進のための試料・資料の取得、及び学芸員、機構職員等の人材育成も目的としている。

体験乗船中は、無人探査機「ハイパードルフィン」の着水作業見学、操縦・調査体験を行った。当該海域では、30～100℃程度の熱水が噴出している場所（たぎり）が多くみられ、採泥、岩石採取、生物採取（エビ、ゴカイ等）を実施した。

参加者は、ハイパードルフィンの潜航中に、会議室やコントロールルームのモニターを通して、ハイパードルフィンのカメラがとらえる海中の様子や予め取付けた実験セットの観察を行った。潜航中や海底では、クラゲやエビ、魚類等の深海生物を観察した。実験セットでは、発泡スチロールのカップ（自身で絵を描いたもの）が縮んでいく様子や、ペットボトル等の水圧による変化が観察できた。採取に成功した堆積物、エビ、魚類等は、ハイパードルフィン揚収後に「なつしま」船内の実験室で研究者の解説を聞きながら、実際に触れて観察した。予め取付けたカップなどの実験セットも観察した。これらの体験を通じ参加者は、水圧の影響や深海の水温の冷たさ、その深海で暮らす生物について学び、海の科学や技術を身近に感じ、多くの新しい知識を得て、海への理解と興味も高まったと思われる。

短い時間ではあったが、実際に乗船し、揺れる船での生活や船で働く人とのふれあい、またハイパードルフィンの操縦を体験することにより操船や採取の難しさを肌で感じ、海洋調査の現場を体験でき、将来の海洋科学技術へ携わる人材の育成に寄与できたものと思う。



ハイパードルフィンの操縦体験



説明を聞きながら生物に触れる様子